

もしも四回目の夜があったなら、  
私はミヤちゃんに何を伝えられていたのだろう。

山村教室ベストセレクション

# ミヤちゃんの窓辺

石山裕子



誰かが歌った荒井由実の『あの日にかえりたい』が涙のスイツチだった。六本木の交差点から乃木坂へ向かう道は狭くて人が多い。誰かにぶつかっても押されても、私は早く家に帰りたいかった。

人がまばらな乃木坂の駅から千代田線に乗った。しかし表参道で乗り込んで来るたくさんの人たちにこの涙を隠せるだろうか。早足で歩いたせいで眼鏡が曇る。汗を拭くふりをして涙を拭う自分に私は腹が立った。空いた座席にどすんと腰を降ろした私を、両脇の二人が迷惑そうに睨んだ。そんなことにおかまひなく、私はバッグから引きずり出したiPodをスマップにあわせ、『青いイナズマ』を耳で爆発させた。

ここまでは記憶にある、昨日の話。

ザラついた廃品回収のアナウンスが、カーテンの裾と一緒に私の目の上で揺れている。遠くに見えるテレビからは三分クッキングのマヨネーズのコマーシャルが流れていた。

「目が覚めた？ もうお昼だよ」

枕元の窓の向こうから聞こえるその声はよく通った。遠くで聞こえる子供の声が外国映画の音声のようだ。しかし、巻き戻されて元気になった拡声器からの濁声は、もう一度眠りそうになった私に容赦がなかった。

「このアパートさ、一階の住人に限ってこうして洗濯物が外に干せるんだよ。オレ洗濯好きだから外に干したいわけさ。干物も洗濯物も天日が一番だよな」

だんだん声が遠くなり、テレビ横のサッシが開け閉めされる

音が聞こえた。そして、真っ青なアディダスのTシャツと白のクロップドパンツという、サッカー少年のような格好の声の主が私の目の前に現れた。

「あ、iPod無事だったからね。大丈夫だったよ、スマップもU2も。あと会社、電話した方がいいんじゃないのかな。今日はまだ木曜日だし」

私はまだ少し朦朧としていた。

「君のバッグ、そこにあるから」

炊飯器の炊きあがりの電子音と同時にNHKの昼のニュースが始まった。

「あのさ、もしかして君、状況がわかってない？　ここはどことか思ってるわけ？」

「……？」

「嘘だろ。外、見てみなよ」

窓の外、背の低い植栽に囲まれた占有スペースに干された洗濯物の向こうには、見慣れた遊歩道と私のアパートの部屋の窓が見えた。

「君んちの真ん前だよ」

「私、どうしてここへ来たんだろ」

「しょうがない子だねえ、君は。駅でオレとぶつかってさ、iPodを落としただろ？　謝ったのに悲しそうにさめざめと泣いてさ」

「それで私はここへ来たの？」

「何だかフラフラしてるし、オレも心配だったから送って来たらそのアパートでさ。鍵がないって騒ぐからここへ来たんじゃないか」

全く憶えていなかった。『青いイナズマ』は聴いたけど。

「あのさ、後で騒がれても困るから言うけど、いろいろやっちゃったよ、オレたち」

全く憶えていなかった。『Beautiful Day』は聴いたけど。

「オレ、これから仕事なんだ。一時には出るからね」

ナイキのTシャツと短パンをはいていることを確かめて、私はベッドを出た。

「憶えていないかもしれないけど、君は自分で、服を脱いでシヤワーを浴びて、そして自分で、それを着た。そのピンクの短パンはいつかの誰かの忘れもの。後で訴えたりしないでくれよな」

こんなことは初めてだ。私は自分の服を探した。

「シヤツなら外だよ。今干した」

「私、服汚したの？」

「いや。脱ぎ捨ててあったから、オレのと一緒に洗った」

窓の外ではハンガーに掛けられた私のストライプのシヤツが、貸シタオルと大きく書かれたバスタオルと並んでバタバタと音をたて、ページュのブラとパンティはチェックのトランクスと一緒にきちんと下着用のクリップハンガーに掛かって揺れていた。

「一時まであと四十五分ある。今日は風もあるし乾燥してるから乾くよ」

他人に下着を洗われるなんて情けない。何かの罰が当たったに違いない。

私のジーンズはありがたいことに、勝手に洗濯されることもなくソファの背もたれにかかっていた。しかし、不本意ながら

下着もシャツも太陽の下ではためいている。仕方がないのでTシャツと短パンは借りることにして、短パンの上からジーンズをはいた。四十五分待つ必要はない。私の家は目の前だ。

通りを隔てただけなのに、このアパートは私の部屋より何ランクも上の豪華な造りの1LDKだった。

急いで帰り支度をしている私の横で、居酒屋の赤いロゴ入りビールジョッキにミネラルウォーターが盛大に注がれた。

「どうせ今日はもう会社行かないでしょ？ そんなに慌てなくていいんじゃないの？ まあ、水くらい飲みなよ」

確かに喉が渴いていた。冷たい水がおいしい。素直に言うことを聞くことが少し悔しかったけれど、体がしゃつきりとして気持ちが悪く少しだけ落ち着いた。

「もう、ずっと行かないかもしれない」

「でもさ、社長さんとパソコンを教えてください内藤さんだけに挨拶した方がいいって」

パソコンを教えてくださいたのは内藤さんじゃない、斉藤さんだ。

「どうして知ってるの？ 私の会社のこと」

「これだよ。君が昨日ここへ来て一時間半、しゃべりっぱなしだったよ。その話の五分の四は会社の話だったじゃないか」

「それ、全部聞いてくれたの？」

「聞いたよ。君の微妙な立場も、君の仕事を横取りしようとしている化粧の濃い流しのエディターの話も。それが悔しくて昨日の六本木の飲み会の途中で悲しくなって、泣きながら帰って来たんだろ？」

小さな編集プロダクションでは事務をしている。総務兼経理兼雑用係の契約社員だ。会社の本筋である編集の仕事以外の

すべてが私の仕事だ。今頃流しのエディターは、私の無断欠勤をいいことに社長に直談判しているに違いない。

「朝飯、食って行きなよ。ちょうど鮭缶あるし玉葱もあるしさ。かき玉スープもできた」

スライス玉葱が、鮭缶と一緒にテーブルに置かれた。

「悪いけどそこに鮭缶を開けて醤油かけて、適当に混ぜておいでくれるかな。鮭、あんまり壊さないように」

言われるままに、私は『松月庵』のネーム入りどんぶりに缶汁ごと鮭をあけ、添えられた箸とスプーンで丁寧に混ぜた。

「よしよし、これをご飯にかける。オレはマヨネーズと七味。君も好きなのかけていいから」

漆塗りの見事な汁椀には黄色い雲のような卵が浮かび、葱の代わりの香菜が青臭く香った。

「飲みたかったらビール、飲んでいいよ。オレは仕事だからパスだけど」

「いいです水で。いただきます」  
「どうぞ、召し上がれ。うまいぞ」

部屋中に玉葱と香菜の香りが広がり、窓からは柔軟剤の風が吹き込んだ。ここ数日の暑さが嘘のように、いつの間にか初秋のひんやりとした風になっていた。

「香菜、好きなんだね」

「おう。ラーメンもそうめんもチャーハンも、みんな香菜だ」  
「おいしいね」

「だろ？ この鮭缶、安物じゃないんだぞ。三越のお中元だ」  
両手でお椀を持ち上げてかき玉スープを啜る。アジアの、どこかの国のお正月の匂いがした。

「まるちゃんさ、悪いこと言わないからこれ食ったら会社に電話しな」

「それもあたしが言ったの？ まるちゃんって」

「田丸美雪だからまるちゃんって呼ばれてるって。だからオレは田宮だからミヤちゃんって呼ばれてるよって。そういう話、したじゃないか。まるちゃんが三十だって言うから、オレが八歳年上だって言ったら、見えない見えないってゲラゲラ笑ってさ」

「田宮さんっていうんだ」

「君んちは103号室の田丸で、オレんところは103号室の田宮。たまに郵便が間違えて届くから、オレは君んちのポストに入れに行ってたんだ。エステイローダーとかTSUTAYAとかさ」

「そうだったんだ。ありがとう」

「君んちにオレの郵便物は届かなかったわけ？」

「そう言えば、行ったことのない表参道の美容室から何か来た」

「それ、どうした？」

「たぶん、どこかにある」

「どうりで届かないわけだよ。そのハガキ、持って行くとカラーリングが二割引になるってヤツでさ。チクショー、どうしてくれるんだよ。オレはそれを待ってたんだよ」

「ごめん。探してみるよ」

「頼むよ。見つかったらちゃんとポストに入れておいてくれよな」

ミヤちゃんは、寝癖かウェーブかわからない短髪でも長髪で

もない中途半端な髪型だ。表参道の美容室でカットして、カラーリングまでしているなんて信じられなかった。

空になった汁椀を、私が無造作に重ねようとすると、ミヤちゃんが突然大声をあげた。

「やめてくれよ。それは重ねるなよ」

対面式になっていているキッチンでその汁椀を丁寧に洗うミヤちゃんを尻目に、私は今度こそ帰り支度をした。

「お世話になりました。このTシャツと短パン借りて帰ります」「いいよ。洗濯機に放り込んでいいよ。だって、オレはもう君のパンツもブラも洗ったんだぜ。Tシャツと短パンぐらい洗うよ」

そんなことをしたら私が着て帰るものがないことを、ミヤちゃんは全然わかっていなかった。私は窓の外の自分の洗濯物を回収して、歩いて三十秒の家に帰った。

私の部屋の鍵はなくなってなかった。

一日半ぶりに部屋の窓を開けると、ミヤちゃんが洗濯物を取り込んでいるのが見えた。いつもの見慣れたフレームの中に、不覚にも一夜を共にした人物が現れるとは、昨日まで思いもしなかった。いつもは、平日のこんな時間にここにはいないし、ミヤちゃんの部屋の窓辺で洗濯物が揺れているところも見たことがない。でも、何だか気持ちがいい。仕事なんて辞めて、毎日こうしてミヤちゃんの窓辺を眺めるのもいいかもしれない。

結局その日、私は会社の就業時間内に電話をしなかった。三時頃どこからか電話があったけれど、留守電に切り替わるとす



ぐに切れた。

救急車で運ばれたとか何時間も気絶していただとか、無断欠勤の言い訳を考えた。

電波が届かないところが大好きな斉藤さんの携帯はなかなか繋がらなかった。何分かして諦めて洗濯をしていると電話が鳴った。斉藤さんからだった。どうやって帰ったかも憶えておらず、昼過ぎまで起きられなかったという、事実ではあるが多少端折った私の説明を斉藤さんはすんなり受け入れてくれた。

「心配したのよ。あのお店出た時、まるちゃん顔色悪かったしフラフラしてたもの。でも、こんなこと初めてじゃない？ 社長も心配してたわよ」

カラオケと煙草とお酒の相乗効果で、斉藤さんの声はまるでオジさんだ。きれいな人なのにもったいないと、いつも私は思う。

「まあ、まるちゃんは初犯だし、大丈夫。私から社長に言っておくから、明日はちゃんと出社するのよ」

斉藤さんはどこにいるのか、まだ夜の七時半なのに電話の向こうからは、何やら女性の嬌声が聞こえた。

会社に行こう。流しのエディターの顔がよぎって一瞬落ち込んだけれど、それは明日だ。そう思うと俄然お腹がすいた。

商店街の雑踏を避けて、私は裏通りを自転車で飛ばした。駅までのまっすぐな道は、夕食時のこの時間ほとんど人通りがない。あちこちの家の台所から、カレーや焼き魚の香ばしい香りが吐き出され、隠れ家のようにあるマレーシア料理の店の独特の甘い香りと混ざり合う。私はスピードをあげてその空気の中

を走り抜けた。

今日は行列がありませんように。

駅裏の担々麺専門店は、テレビで取り上げられるたびに行列になる。芸能人やらスポーツ選手やら、近くに有名人がたくさん住んでいるからややこしい。その人たちがいちいちおいしいと褒めるお蔭で、私のようなお得意さんが食べたい時に食べられない。今日は行列がありませんように。

行列はなかった。しかし、女連れのミヤちゃんがいた。

きれいな女の人だった。どこかで見たことがある。その人はミヤちゃんの目を見つめながら担々麺を啜っていた。そして二人のどんぶりの間には、ガラスの小さなボールに盛られた香菜。出たな、毎食香菜オトコ。

私は二人からは見えない、カギ状になっている少しベタ付くカウンターの隅に座った。刺激的な辛さに汗をかきながら私が食べ終わっても、二人はまだ見つめ合って話し込んでいた。

この店のマスターはヘビースモーカーで有名だ。彼は左足に重心をかけ右足をクロスさせる自慢のポーズで柱に寄りかかると、換気扇めがけて細く煙を吐いた。

「ねえねえ、ああいうお客、迷惑でしょ。こういう店をデートに使う人なんているんだね」

「いいんだよ。ミヤちゃんは十年來のお得意さんだし、ああやって有名人を連れて来てくれりゃ、宣伝になるってもんさ」

あんなに行列を作っておいて、彼はまた宣伝する気のようにだ。

「あの人、有名人なの？」

「夜中にニュース読んでる人だろ？ オタクな追っかけがいはいいるっという」

「ミヤちゃんは何やってる人なの？」

「ミヤちゃんはほら、あれだよCMディレクターだったんだよ」  
「だったって、今は？」

「知らねえな。ディレクターは体壊して辞めたって言ってたけど、いつも連れて来るのは美人の有名人だからな。似たようなことをやってんじやねえのかな。まるちゃんはミヤちゃんと知り合っていたのかい？」

「違うよ。近所ってだけ」

「ほう、そうかい。まあ、ミヤちゃんがこんな早い時間に来るのも珍しいよ。いつもは夜中の閉店間際だからな」

どうりで私はここでミヤちゃんに会ったことがない。

「そうだこれ、持って行きなよ」

タクシーにきれいに並べられたマスターの手作り餃子を自転車に積んで、私は人通りが一段落した表通りをとるところ走った。お腹もいっぱい風も気持ちよかった。

「田丸さん、例の芋、今日入ったけど」

店先で履物屋の奥さんとおしゃべりをしていた酒屋の奥さんが私を呼び止めた時、悲劇が起こった。ずずずと、自転車の後輪がパンクしたのだ。

「あららら、大変だ」

ちつとも大変そうじゃない酒屋の奥さんは、無様にアスファルトに倒れ込んだ私を抱き起こしてくれた。酒屋の力仕事で鍛えた太い腕は、難なく自転車を路肩によせ、私の後ろで迷惑そうに止まっていたベントを慣れた手つきで誘導した。

「ごめんなさいねえ。あたしが変なところで声をかけたから」

「いいえ。田中屋さんのせいじゃないですから」

「タツパーの中身大丈夫かな。ポーンってさ、大きく弧を描いて地面に着地したからね」

体操の実況アナウンサーのような物言いに、私は笑いそうになっただけで、じんわりと湧いて来た膝の痛みにそれどころではなかった。それでも中身が心配になってふたを開けてみると、浅いタツパーにぎっしりと詰められた餃子は何事もなく並んでいた。

「自転車、置いて行つてくださいよ。膝もぶつけちゃってるし、これを引っ張って歩くのは無理だからさ。うちで預かっておいて、なんなら明日、宮本サイクルに修理に出しておきますよ」

「そんな」

「いいのいいの。田丸さんには御最良にしてもらってるし、困った時はお互いさまよ」

奥さんは自転車を片手で持ち上げると、店の横にある配達用のバイクの隣にそつと置いて店内に入った。そしてすぐに出て来た奥さんは、持って来た持ち手のついた紙袋にタツパーを入れて私に持たせてくれた。

私は、タツパーをぶら下げて膝を庇いながら歩いた。こんな姿を誰にも見られたくない。なんとか歩けたけれど、悲しくなつて暗い夜道なのをいいことに私は泣いた。

「なんだよ？ 転んだのかよ」

悪いことは重なるものだ。ミヤちゃんだった。足を引きずる姿どころか、涙でぐちゃぐちゃの泣き顔を見られるなんて最悪だ。

「おぶってやるよ」

「いいよ」

「遠慮するなって。痛くて泣いてるくせに。オレは君に朝飯食わしてパンツも洗ったんだ。いまさらおんぶぐらい遠慮するなって」

メチャクチャな理屈だった。肩にかかっていたデイパックをお腹に抱いて、ミヤちゃんは私を強引におぶった。

「担々麺の女の人とデートなんじゃないの？」

「違うよ。デートしてから担々麺食ったんだよ」

そんなこと、ちゃんと答えるなよ。

「そういうことは、まるちゃんも担々麺食ったの？」

「食った。違う、食べた」

「ふうん」

「何がふうんなの？」

「そしたらさ、オレたちの明日の朝の排泄物は、五分の四ぐらいは同じものだなって思ってたさ」

小学五年生の男子レベルの発言に私は呆れた。

「なんでさ、いつも五分の四なの？」

「朝飯も晩飯も同じもの食っただろ？ その間にオレはバナナとポッキー食ったから、出るものの違いと言えばそれぐらいじゃないか」

私が訊きたいのはそういうことではない。

「そうじゃなくて、その五分の四っていう微妙な割合はどこから来るのかって訊いているの」

「だって、ほんとに五分の四だからだよ」

ミヤちゃんは真面目に答えた。あながち間違っではないの

かもしれない。ミヤちゃんの体から伝わるリズムミカルな振動と温かな感触が心地よく眠りそうになる。人の背中がこんなに気持ちがいいことを、私は初めて知った。

アパートの前で思いのほか優しく私を降ろしてくれたミヤちゃんとは、私が部屋の鍵を開けている横で、タッパーからほのかに香るニラのいい匂いに素早く反応した。

「あ、これさ、あの親父の餃子だろ？ 今から一緒に食わないか？」

「今からって、担々麵食べたばかりだよ」

「大丈夫だって。焼いてるうちに食欲が湧いてきて、また食べるよ。餃子ってそういう食い物だよ。うちにさ、餃子専用の鉄鍋つてのがあるから、オレが焼いてやるよ」

ここでもメチャクチャな理屈を披露したミヤちゃんは、私の部屋の鍵をかけ、もう一度強引に私を背中に乗せると、自分のアパートに向かってガシガシ歩いた。

その日二度目のミヤちゃんの部屋は、昼とは違って何だか艶かしかった。私が自分の部屋でうとうとしたり斉藤さんと電話で話している間に、ミヤちゃんはあるなにかきれいな人と二人きりでここにいたのだろうか。きれいに整えられたベッドは、今朝私が目覚めた時とは違うカバーが掛かっていた。

ワニの鍋掴みを両手にはめて、ミヤちゃんがキッチンから鉄鍋を持って現れた。

「黒酢で食うとうまいんだ」

少し深めの小皿に黒酢をなみなみと注いで、ミヤちゃんは私の前に置いた。丸い鍋に花びらのように並べられた餃子には、

家庭ではあまりお目にかかれないうな、見事なバリパリの羽が生えていた。

「これでさ、五分の四、五くらいは同じものが出るな」

ミヤちゃんはまたもやここで微妙な割合にこだわった。三十個の餃子は黒酢のお蔭で跡形もなく私とミヤちゃんの胃袋に収まった。膝が痛み出すといけないということで、五百CCの缶ビールを二人で半分ずつ飲んだ。

そして帰りがけ、ミヤちゃんは私に湿布をくれた。

「その膝、冷やした方がいいか温めた方がいいかわからないから、冷感と温感、両方あげるよ。まるちゃんもわかんなかったらどっちも貼っとけ。どっちか効くだろう」

本気で言っているとは思えなかったけれど、私はありがたうにいただくことにした。

帰りのおんぶを断った私をミヤちゃんが送ってくれた。歩いて三十秒の帰り道を、ゆっくりと並んで歩いた。

「会社、どうした？」

「行くよ。斉藤さんが、心配しないで出社しなさいって言うてくれたから」

「そうだろ。苦労人の斉藤さんはさ、やっぱりいい人なんだな」

ミヤちゃんは、なぜか斉藤さんが苦労人であることを知っていた。

結局私の無断欠勤は、斉藤さんのお蔭で有給休暇として扱われた。できれば会いたくなかった流しのエディターも、今朝方届いたというおばあさんの大往生の知らせで急遽静岡に帰って休みだという。おばあさんには申し訳ないけれど、私はちよっ

とホツとした。

「でも、まるちゃんあれよ。全く記憶がなくなるっていうことは、お酒と一緒に睡眠薬とか痛み止めとか、そういうものを飲んだんじゃないの？ よく思い出してごらんさいよ。きっと何か飲んだのよ」

斉藤さんはいつものように喫煙スペースの換気扇の下に立ち、大量の煙を吐き出しながら私に言った。その時突然フラッシュバックした。電車の中がとても暑かった。スマップを聴いている間に頭が痛くなり、私は駅のトイレで鎮痛剤を飲んだことを思い出した。

そういうときは肝臓にダメージを受けていることが多いからと、斉藤さんは私をいつもより三十分早くあげてくれた。とてもありがたかった。お酒にまつわる様々な武勇伝がある斉藤さんは、酒飲みのみ失敗にはことのほか優しい寛容な人なのだ。

商店街の宮本サイクルの店先では、新しいタイヤに履き替ええた自転車私を待っていた。

「もうタイヤがイカれてたんでさ、新しいの履かせただけだよかったのかな」

宮本サイクルのおじさんは申し訳なさそうに私に言った。「いいんです。助かりました」

予想外の出費だったけれどイカれたものはしょうがない。おそるおそる乗ってみると、膝もそんなに痛くなかった。帰りに寄った田中屋の奥さんに自転車の自転車を言っ、量り売りの芋焼酎を二本詰めてもらった。

いつもよりたった三十分早いだけなのに、私は何だか得をし



た気分だった。夕闇のアパートの自転車置き場で私が酒瓶を降ろしていると、通りを歩いているミヤちゃんが見えた。またまた女連れだった。担々麺の人と同じ人かどうかはわからなかったけれど、二人の後ろ姿は何だかカッコよく、私はしばらく見とれた。

膝は少し痛かったけれど、私は芋焼酎を飲むことにした。金曜の夜にお酒を飲まないなんて、私にはできない相談だ。しかしつまみがない。週末の一人酒盛りにつまみがないなんてあり得ない。焼酎には焼きトンだろう。私の口は、瞬時に焼きトンを受け入れる準備が整った。

私は駅の向こうのテイクアウト専門の焼きトン屋へ、膝を少し庇いながら自転車を走らせた。いつもの裏通りのこの台所ストリートは、週末決まってニンニクとオリーブオイルと唐辛子の香りがする。どうも最近のこの辺の住人は、週末はイタリア人になるらしい。同じニンニクと唐辛子でも、中華料理でないのがこの世田谷区屈指の高級住宅街の特徴だ。

担々麺のマスターに餃子のお返しのアセロラドリンクを買って、自転車の前カゴに入れた。ヘビースモーカーのマスターはビタミンCものに弱いのだ。煙草で破壊されるビタミンCの補給を怠りさえしなければ、癌にならないと思いついでいる。そんなものは焼け石に水だといくら説明してもきかないマスターに、私は以前、焼豚のお札にレモンの何倍もビタミンCが含まれていると言われるローズヒップの粉末をあげたことがある。しかし、不味いだの、こんなものがビタミンCのほしくないのだという理由で、マスターは何と捨ててしまったのだ。親切を

踏みじられた私は怒ったけれど、自分が信じたものは疑わな  
いという姿勢を貫き通すマスターに敬意を表して、私とマスタ  
ーとの間ではビタミンCの代名詞としてアセロラドリンクが公  
認商品となったのだ。

閉店間際の焼きトン屋のお兄ちゃんに、シロとタンとレバー  
とバラを塩で二本ずつ焼いてもらい、二人前のモツ煮も入れて  
もらった。これで準備は整った。担々麺の店の前に自転車を止  
め、前カゴのアセロラドリンクと熱々の焼きトンを入れ替えて  
いると、何と出て来たのは女連れのミヤちゃんだった。

「なんだよ、まるちゃんもまた担々麺かよ」

女の人はこの前と違う人だった。どう間違えてもこの店から  
出て来るようなタイプの人ではなかった。

「違うよ。タップパー返しに来たの」

私は女の人に軽く頭を下げた。その人も笑って返してくれた。  
行列はないものの、店の中は満席だった。マスターに目で合  
図して、ビールケースの横にタップパーと六本パックのアセロラ  
ドリンクを置くと、私は店を出た。

「一緒に帰ろうぜ」

ミヤちゃんが私を待っていた。

「あの人は？」

「帰った」

私は自転車で早く帰りたかったけれど、人の波を避けて裏通  
りを歩くという条件で、ミヤちゃんと一緒に歩いた。

「この時間にデートが終わる人って何者なの？」

「お、それはいい質問だ」

ミヤちゃんは無遠慮に前カゴの焼きトンの匂いを嗅いだ。

「これから仕事をする人だよ」

「夜の仕事ってこと？」

「まあ、そうだな。でもさ、彼女たちの名誉のために言っておくと、ホステスじゃないぞ」

「彼女たちって、昨日の人も夜の仕事なの？」

「ああ、彼女は前の仕事の後輩。昨日の午後、仕事場でバッタリ会ってさ。夜はメディアアシティでテレビの仕事があるっていうんで、飯食いながら時間つぶしたわけ」

メディアアシティは駅の反対側にある、テレビ局のサテライトスタジオだ。人気番組の収録日には、こういう理由かわからなけれど駅周辺が妙ににぎわう。

「二人とも担々麺がいいって言ったの？」

「どういう意味だよ？」

「どっちも担々麺って感じの人じゃなかったから」

「オレが無理矢理連れて行ったわけじゃないよ。うまい担々麺の店があるよって言ったなら、そこでいいって言ったのは彼女たちだからな」

「ふうん」

「膝、大丈夫みたいだな」

「ありがとう。もうそんなに痛くない」

「湿布、どっちだった？」

「冷たい方。タオルで冷やしてみたなら気持よかったから」

「よかったな」

私のアパートの前に着いた。

「ミヤちゃん、芋焼酎は飲む？」

「飲むよ」

「昨日のお礼。一本あげるよ。今、借りていたTシャツと短パンと一緒に持って来るよ」

「それさ、あの店の焼きトンだろ？ 今から一緒に食わないか？ 焼酎飲みながらさ」

昨日も聞いたこのセリフ。

「今からって、担々麵食べたばかりなんじゃないの？」

昨日も言ったこのセリフ。

「じゃ、待ってる」

私の返事を待たず、ミヤちゃんは自分のアパートに向かってガシガシ歩いて行った。

私は急いで部屋に戻り、プラスチックのパックのままも味気ないので、家にある一番大きい皿に放射状に焼きトンを並べた。冷蔵庫にあったちよつとしんなりしたパセリを氷水に浸し、水気を切ってこんもりと皿の中央に盛った。これが香菜だったら百点だったけれど、ないものは仕方がない。モツ煮も小鍋に移した。美しい二人前だった。

私がミヤちゃんの部屋に上がり、テーブルの真ん中に大皿を置くと、ミヤちゃんが大笑いした。

「ちゃんと二人前あるじゃないか。悪かったな気づかなくて」

「気づかなくてって、どういう意味？」

「最初からあつたんだろ？ オレの分」

それは違う。私の買い物に一人前という単位がないだけだ。

「どうして約束もしていないのに、私がミヤちゃん分まで買うの？ 私の彼氏の分かもしれないじゃない」

「だって、もし彼氏の分だったら、まるちゃんこうしてここに

は来ないだろ？ オレと一緒に食おうって誘った段階で激しく断るはずじゃないか」

恐れ入った。私の負けだ。

魚焼きグリルを熱くして、ミヤちゃんが少しぬるくなった焼きトンを温めてくれた。香ばしい香りが立ちこめ、私の空腹具合も最高潮だった。肉の脂がヌルついて手を洗いたかったのですが私はキッチンで一生懸命何かを刻んでいるミヤちゃんに断ってバスルームを使わせてもらった。中に入るとキッチンの焼きトンの香りとは対照的な濃厚な香りに包まれ、私はどきりとした。たぶんその辺のスーパーに売っているものではない石鹸の香り、私の過去、と言っても二日前の記憶を少しだけ引っ張り上げた。

ミヤちゃんが刻んでいたのはオクラだった。濃度のある大和芋のころろと一緒に、ガラスの小鉢の中でふるふるとかわいく揺れていた。モツ煮は山盛りの葱とともに漆塗りの器に上品に収まり、少し黄色みがかった焼酎のオンザロックのグラスは、何とバカラだった。

「三日連続だな。まるちゃんがオレんちにいるの」

「そうだね」

なんとということだ。どういうことだ。

「なんなら明日もあさつても来るよ」

「残念だな。オレは明日からしばらく出掛けるんだ。だからいないよ」

本気にするなよ。

「そう。気にしないで。今のは冗談だから」

「わかってるよ。だいたいさ、三日も一緒にいるとわかるよ。まるちゃんのこと」

「それはずるいよ。私はミヤちゃんのこと、ほとんど知らないのに」

「そうか？ そんなことないだろ」

「だって、ミヤちゃんは私の会社のこと知ってるじゃない。でも私はミヤちゃんが何の仕事をしているかも知らないんだよ」  
担々麺のマスターからは少しだけ聞いていたものの、なぜかミヤちゃん本人の口から仕事の話は出なかった。

「確かにそうだな。じゃあさ、この三日間でまるちゃんがオレについてわかったこと、言ってみなよ」

「えっと、まず女の人が好きでしょ。それで、持ってるものがバラバラ」

「バラバラ？」

「そう。だって、このグラスはバカラだし、モツ煮のお椀は上等な漆塗りでしょ。銚缶は三越で、お風呂の石鹸はどこか遠くの国の香りがする。だけど水を飲む時は居酒屋のビールジョッキだし、バスタオルはどこかの貸しタオルで美容院のカラーリングは二割引。価値観が統一されてないよね」

「おお、鋭い指摘だな。まるちゃん、オレのこといっぱい知ってるじゃないか」

「ミヤちゃんほどじゃないよ。憶えていないからしようがないけど、おととい私、もつとたくさん自分のことをしゃべったんじゃないかと思うんだよね」

「会社のこと五分の四、犬のこと五分の一だったよ」

「私、チャブのことも話したんだ」

「チャブとの別れのシーンはオレも涙が出そうになったよ」

ミヤちゃんは、本当に私の話をちやんと聞いてくれたのだ。

「それでね、斉藤さんに言われてわかったの。記憶をなくした原因」

「何だったんだよ？」

「おとといみたいに記憶がなくなるのって、睡眠薬とか鎮痛剤とかそういう薬をお酒と一緒に飲むとそうなるんだって。確かに私、駅のトイレで鎮痛剤飲んだだよ。いつもよりたくさん飲んだと思う。斉藤さんが言うには、まるちゃんは自分で飲んで自分の家だったからよかったけれど、そんなふうになって、目覚めたら知らない男の家だったりしたら、ほとんど百パーセント強姦されてるわよって」

「まさか、オレが強姦したと思ってるわけ？」

「思っていないよ」

「まあ、でもオレも白状することがあると言えばある」

「やっぱり強姦だったとか？」

「違うって。その逆だよ。オレたちホントは何もしていないよ」  
少しだけ、私の体の力が抜けた。

「まるちゃんがひとのベッドであんまり気持よさそうに寝てるから、最初はちよつとからかったつもりだったんだ。でも、ホントに信じちゃってるまるちゃん見てたら、ま、いいかってさ。でも、オレは嘘はついてないぞ。いろいろやつちやつたって言ったけど、エッチしたとは一言も言っていない」

私はミヤちゃんを責める気にはならなかった。そんなことを簡単に信じてしまう、私も私だ。

「そうだよ。いくら何でも全然憶えてないなんて、自分でも

おかしいと思つたよ」

「実際オレもちよつと調子悪かつたし」

「どこか、具合が悪いの？」

「四、五日前から背中が痛くて、薬を飲まないとい眠れない日もあるんだ」

「それで？」

「オレはもともと麻酔とか痛み止めとか、あんまり効かない体質なんだ。だから、ああいう薬を飲む時は人よりたくさん飲むんだ。恥ずかしいけど、オレ、錠剤飲むのが苦手でさ。おともいも君の話を聞きながらあのビールジョッキの水に鎮痛剤を入れたんだ。溶かして飲むうと思つてさ。でも、オレがシャワーを浴びてる間に君が半分くらい飲んでやったんだよね。ごめん。君の失敗の駄目を押したことになるもんな」

「謝らないでよ。私が悪いんだから。でも、背中そんなに痛いんなら病院へ行った方がいいよ」

「それがさ、床の固さがちよつとよかつたらしくて、昨日今日はあんまり痛くないんだよ。怪我の功名つてやつだな」

「床で寝たの？」

「だつて君はシャワーから出て来ていきなりベッドで爆睡だろ。薬のせいかもしれないけど凄い寝相だし、だからオレは床で寝たんだよ」

具合の悪いミヤちゃんを床で寝かせたなんて、謝らなければいけなかつたのは私の方だつた。

「でも、今日、彼女とできたのはまるちゃんのお陰だ」

ミヤちゃんのこの一言が、私の真面目に謝りたいという気持ちを見事に相殺した。



焼きトンの皿は串だけになり、芋焼酎の四合瓶は空になった。話の途中でミヤちゃんが冷蔵庫から出してきた海鞘ほやの塩辛も全部食べた。

あの石鹸の香りを嗅ぎたくて、もう一度手を洗わせてもらうと私はミヤちゃんの部屋を出た。短い帰り道、私は深呼吸吸がてら、両手の石鹸の香りを嗅いだ。遠い外国の香り。濃い色の景色が見えるようだった。

それから一週間、申告通りミヤちゃんは留守だった。

流しのエディターは何と静岡に帰ることになった。急に現れて私の地位を脅かし、私を辞めさせる算段までしたその人は、静岡のタウン誌の編集長になるのだそうだ。おばあさんのお葬式で会った市議会議員直々に依頼されたと、送別会でうれしそうに挨拶をした。経理も総務も雑用もできるエディターは、小振りな花束を抱えて微笑み、私の前から去って行った。

その会のあと、斉藤さんに誘われて私は六本木の高級クラブで久々にたくさんのお酒を飲んだ。金曜日だったし、こういう店は斉藤さんのおごりだから何の心配もない。仕事も辞めなくて済んだ私は、たまにはタクシーで帰るのもいいかもしれないなどと思っていた。

そして帰りがけ、いいことは重なるものだ。ガラガラ声の斉藤さんは私をタクシーで送ってくれるという。斉藤さんは横浜に住んでいるので世田谷区民の私が先に降りると、「よい週末を」などと洒落たことを言っ手まで振ってくれた。夜風が気持ち

よく、どこからか秋の深まりを知らせる金木犀がしつとりと香った。

公園を横切ろうとした私はベンチの人影に気がついた。私は少し気を引き締めて早足で通り過ぎようとした。

「まるちゃん？」

その人影が私を呼び止めた。スーツ姿のミヤちゃんだった。

「なんだミヤちゃんか。おどかさないでよ」

ミヤちゃんは返事をしなかった。私が近づいても顔を上げず、胸を押さえて荒い息をしていた。

「どうしたの？ 胸が痛いのか？」

ミヤちゃんは弱々しく頷いた。

「肩、貸してくれるかな。家に帰りたい」

体を丸めたまま、呻くように言った。

「痛くて、立て、なくて」

ミヤちゃんはそう言うのと、私の方に手を伸ばした。

「家に帰ってもダメだよ。救急車呼ぶよ」

「大丈夫、横になれば治るよ。だから、肩、貸してよ」

ミヤちゃんはふらふらと立ち上がって私の肩につかまった。

私はミヤちゃんの腰を抱いて、あまり体を揺らさないようにゆっくり歩いた。嘔吐するように息をするミヤちゃんの体は小刻みに震えていた。

部屋のドアの前まで来ると、ミヤちゃんはポケットに手を入れて鍵を取り出した。しかし私が受け取るより先に、鍵はミヤちゃんの手からすると滑り落ちた。私は玄関に倒れ込んだまま動こうとしないミヤちゃんの上着を脱がせて、ベルトを緩めた。

「ベッドへ行ける？」

這うようにしてベッドにたどり着いたミヤちゃんは自力でベッドに上がれず、私が足を持ち上げてやっと寝かせても、ミヤちゃんはじっとしていなかった。

携帯で救急車を呼んだ。ベッドの上のミヤちゃんは、シャツを脱ごうとしてボタンを引きちぎり、息を吐くたびに声をあげた。サイレンがアパートの前に止まり、ストレッチャーに乗せられる頃、痛みに耐えきれなかったミヤちゃんは気を失っていた。

「田丸さんが救急車を呼んでくれたの？」

ミヤちゃんのアパートの同じ敷地内に住む大家さんの若奥さんが、救急車の横に立っていた私に声をかけた。私のアパートもミヤちゃんのアパートも同じ大家さんなので話が早い。若奥さんは、ミヤちゃんの実家に電話してくれるというので私はミヤちゃんと一緒に救急車に乗った。

こうなるまでのミヤちゃんの様子を私が救急隊員に説明すると、二、三質問を返され、その隊員は何か難しそうな顔をしてメモを取った。動かなくなったミヤちゃんを乗せてストレッチャーが行ってしまおうと、することがなくなった私は薄暗い病院のロビーに座り込んだ。

ミヤちゃんはどこがあんなに痛かったのだろう。大人の男の人が痛くて痛くて気を失うなんて、一体どんな痛みなのだろう。私の体もどんどん冷たくなり、ミヤちゃんのことを考えると涙が止まらなかった。

静まり返ったロビーに足音が聞こえた。大家さんの若奥さんだった。

「田丸さん、ごめんなさいね。駿くんのお家と連絡が取れたから、もう大丈夫。主人の車が外で待っているからそれで帰ってください。こんな夜中に本当にごめんなさいね」

駿くん？ ミヤちゃんは駿くんっていうんだ。

初めて会った日の夜、聞いたような気もした。けれど、私の中ではミヤちゃんはミヤちゃんだった。

結局ミヤちゃんは次の日帰らぬ人となった。重症急性膵炎だったそう。救急車で運ばれた時には既にショック状態で、どこからかの内出血もひどくて手が付けられなかったそう。大家さんの若奥さんが親切にいろいろ説明してくれた。

ミヤちゃんは有名な映画監督の一人息子だった。あまりの忙しさに生死の境を彷徨<sup>さまよ</sup>う大病をしてCMディレクターを辞めた後は、お父さんの映画の仕事を手伝っていたそう。

大家さん一家はミヤちゃんの家族とは親戚で、駿くと若奥さんは大学の同窓であることもわかった。

お葬式の場所も日取りも聞いた。ミヤちゃんのオソウシキ。不思議な響きだった。

いろいろ考えたけれど、私はミヤちゃんのお葬式には行かなかった。

何とか一週間が過ぎた土曜の午後、私は部屋から見えるきれいな秋空をぼんやり眺めていた。ミヤちゃんの部屋の窓が視界に入らないように注意深く眺めた。

夕方、玄関のチャイムが鳴ってドアを開けると、そこには大

家さんの若奥さんと白髪が美しい初老の女性が立っていた。その人はミヤちゃんのお母さんだった。私が救急車を呼んで救急隊員にミヤちゃんの様子を説明したことを感謝してくれていた。あんなに苦しんだミヤちゃんが目に焼き付いていたので、苦しみながら亡くなったのではないというお母さんの話は私にとって大きな救いになった。

これは後でわかったことだけれど、ミヤちゃんのお母さんは有名な脚本家だそう。何と十五年前、ミヤちゃんが主演でお母さんが脚本を書いたドラマがあったと若奥さんが教えてくれた。ミヤちゃんは俳優だったこともあったのだ。

そんなミヤちゃんと私は三回も夜を共にした。しかし、事情はどうあれ、そのすべてを飲食に費やした私は何と愚かなのだろう。不謹慎な後悔が、グルグルと私を取り巻いた。

そして、あの暗い公園で私を呼ぶ声を聞いた夜、ミヤちゃんの一大事であることがわかるまでのほんの二、三秒、私は初めて四回目の夜を楽しみにしている自分に気がついた。もしも四回目があったなら、私はミヤちゃんに何を伝えられていたのだろうか。

初七日の法要が終わったと言って、ミヤちゃんのお母さんが小さなお菓子の箱を私に置いて行ってくれた。きれいな薄い色のお菓子が五つ並んでいた。私は真ん中の水色のお菓子を一口で食べた。

出たな、五分の四オトコ。

なぜか気持ち少し楽になった。私は出窓のカーテンを思い切って全開にした。ひっそりとしたミヤちゃんの窓辺で人影が

動いた。お母さんがミヤちゃんの部屋の片付けものでもしているのだろうか。

私はお菓子が四個並んだ箱を、ミヤちゃんの窓辺に向かって供え、秋の香りがするという、斉藤さんからの貰い物のお香を焚いた。それはミヤちゃんの部屋のバスルームの石鹸の香りだった。私の胸の奥と鼻に同時に痛みが走り、涙があふれて何も見えなくなった。あの石鹸はまだ、あの部屋のバスルームにあるのだろうか。

私は涙を拭ってもう一度ミヤちゃんの窓辺を見た。ちらちらと動く人影は少し元気になっていた。その時、ミヤちゃんの窓辺と私の窓の間の通りを緑色の車が横切った。大家さんの若奥さんの隣の助手席には、あの美しいミヤちゃんのお母さんが座っていた。

さようならミヤちゃん。ちゃんとお別れに来てくれてありがとう。

今度は私の目の前を緑色のとんぼが横切った。

(了)

◆◆著者プロフィール◆◆

石山 裕子（いしやま ゆうこ）

様々な仕事を通じて出会った出来事や忘れられない言葉、忘れたくない言葉を大切にしようため、十五年ほど前から日記代わりにエッセイを書き始める。

書きためたその中の一つが、某酒造メーカーの酒にまつわるエッセイ集に収録されて以降、速度を上げて書いていくうちに日常の機微を物語にする楽しさに目覚め、小説に転向。

二〇一三年四月山村教室の受講生となる。

◆◆奥付◆◆

タイトル 「ミヤちゃんの窓辺」

著者 石山裕子

編集・発行 山村正夫記念小説講座 運営事務局

ウェブ管理 ウーニクス

本作品の一部、または全部を、無断で複製・転載・配信等を行うことを禁止します。

本作品を無断で改変等を行うことも禁止します。

権利の侵害となりますので、発行元に許諾をお求めください。